栄花物語

後悔乃大将
とりのまへ十一

後悔ちがい

かくて四ちたどのくらいぺとーせいぐらいあ
やこのほどにきんぶらちょうえんぐらいあ
ばるるをぺまくこてをそぶみあらで
まぐさをせばるるぐもふあたよりをせばた
こまいぱまていのぼにでうたてそはすあせばた
ばるたのくさちぜんぐのゆあさた
ぐうぺまくこんぐうをりめころがそく
ばさまてぺたとあまよのをばがーえ
ぐうたぺらこらせばとてをぺまくこをと
ひとすんやとうちがうせばるゆしぺま

九曜文庫

りちろぐぜぱきくゑくさまでいひきこえさ
せぬぱつのくちちろ六日八七日のくよるまぱあづちし
ぎるぬれてとちるまでぬぱーのうづめとて
ひろーきこーちろまぱくぐめでーくぱーきふい
七日にくれゆのあるべきれぱまくよさちの
れゆゆのくこしぐもさぬぐくのくまろぬど
よくちうちあくいせぬてぱきくきいわを
ちぬしぎるまぱぐりをおそろまうてさ
ぬべきそうくちぱぐーつのれそひらちあ
ゆくぱちちよのばるぬよばてうにくおい
ませぱみかぬいちあつまんそうぐまいぬと

のくうちのそくうぱさるうのひくぐそれさるべ
きのうちるくあいあくぐらぬいちぬ
しまぐりぱのくまちみちうちをべてあさぬ
まうくぬしまきれるぱくうちにまぐころ
るにくくおぬうぱりのをくひうう
のくまぬぱさまどもうぐまくこといちぐ。
ぐんのくさぐろちのくくぱいるくさのわく
ぐちぬぱよびうくせていふくしぐもあまぐを。
りのくをのいふくまぱられもそまどを
しくおがにべうくあをぱくぐのあいるまと
てぱうぐうおそろしきくしぐもあまど。

さいしのけ

さうとしてもちぶをねがひとりどんぶこのとのに
ハこゆつのそそうづの君のりぶめハぶてぶぶれ
どのゆうとぶらをねそろしかりしかどぞそ
まをとうろぶりまはひのまんにせさせ給ふーか
どぶぶうぶぶぶされとくめうあうてそそまぞ
このうーぶちうにぶとぶぶとうぶとうぶぶぶぶぶ
うえんさせつるもそまらもそをちんをぶぶ
のハあやうくあぶつうれくあがりめんりぶ
ぶぶゆまつうんとあまぶりて海ちうあ
いとをぶをぶきこーめてやぶぞりのもの
給ふせぶあからせ給ひねぶうきひこーのし

海をぶりのうちにつをて海いうすまぶどぶとべ
てれうちをあうきぶせ給てどそぶがきれぶ
四条修理大夫海ぶうてあうきへてうぶ海いうう給へ
ぶぶうぶーあうまてれうちうどうせ給へぶぶ
ゆうあぶつゆぶうう海いうんぶまいうまうん
ぶれみぶううう海いうんぶまいうまうん
まぶぶとうきうーぶいぶできんいぶぶく
とんよううきぶやとの給ふんまどぶそうう
の修理とあうせてのくまうぶかぶう海いうまて
しとんよううせどぶるとれうちあれぶどう
ぶまぶあうまうてうぶ海いうほどんぶまいう

つさるぷようげうにこまつのそ
うげあらう迄てこのうげとあよあれ
こくあやまつかくぶひさこ迄とう先
ようしらへばのこのものをのくいふう
あ迄やうあんこのうげとぐ先てきやう
ある迄くとあ迄ぷくらふハ正月六日か
ひとぷのいくぐうせいせさ者迄へばげと
じあてそこらのそうひさこ迄とあを
くうぷそのかどのおどろくしさハぷくこ
ゆるべし心参物新よさ迄ぷれりのくものさ
へぐうげあつもつるりのとぷぐ知ぐこと

くくくの内供入口 三十四

うぐとあいくうぐとくちゆうりふりぐ
よぷさこそとのくまりしぐぷやぐてさえ
いくせ迄ねぷおさゆくゆしちぐぐも世の
つるるるぷうるべのりのハこの二三日のりぐ
のれあるとまねよぷのうるくかさ者迄つる
よぷまくくいくぐうせさ者迄へどうひを
かーぷさべさそうくちみかありぐぷれあ
内供ぐうぐとありてきりるぷうへのれく
らのぷ内供のきくぷひぐうれあくらぐくに
てくうかきれぐのまりくを迄ぷくさふ
ーをうるべよくうあつう迄つるうぐも。

もべてゝとあさゆーきとらあぽゆう
へゝとゝぐさそはつゝ治てゝふさせ治
ぽゝれしようちにちるどもゝろてゝぐ
うあゝまゝにみゝさせ治ゝとあやゝまゝうゝとニ
ろぐゝあゝゝるぐゝてゝゝてきゝにおゝり
まゝにはゝよのゝ乃あゝとゝあゝてゝうせゝ治
あゝるゝやゝあゝんゝとゝおゝゝまゝにゆゝゝまゝう切ゝげゝ
よゝつゝまゝてゝゝぽゝのゝもゝゝあゝみゝゝて
まゝらせ治ゝぐゝぽゝとゝあゝさゝゆーゝうゝてゝゝゝ
もゝゝゝげゝてゝのゝゝまゝゝわゝゝうゝせ治ゝもゝゝゝぐゝき
にゝぽゝゝゝげゝどゝのゝゝ十一ゝゝゝゝゝぽゝゝゝゝぐゝゝゝゝゝ

ぽゝゝぐゝこゝのゝゝてゝゝゝゝゝりゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ治
ゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝちゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こうろく

きうんぞうこのゆうとそうでとをと
きんとそさうんのめのをうくれくらよ
せにうでうにおまうへもるどられもゆ
うんりむうしのれきーきるみこんにあい
めせびハつをこうろうあべーとてぞのび
てすのくぶぞーごうもれまうはがーめ
ぶのうづうこんてありまうておまう
へよハこのくくのきねのをそをひさうけて。
おりるるもうあをあらびりてがーてうれ
ざをばれうあのくちのうこのをーうびう
るうとふうとりとるさみどに。このうう

るるにるさるにあにてうくうぞるやをう
うれぶそといひくぶゆまのふうとのうさ
ひくぶよるまひてあれいうぐるぶるぶん
ぞぶをえつくうあつてやくまぐりあるこ
とうむらうずふるべきぐうるもおうちを
ましとうくあるべうぶあうまにうろうく
ーそいるぞびひつぐをかうをぶうぐぶう
ぐうるるさこーもかーさうんのあのをま
ぶひとうさあをそぶちのまんとの ぶへぐ
めのやくるるちぶるとみるにちんぶうと
さあきのにーそあうをきをまとあハ

まことにうれしくてちゝくうへらせ給そうりかしやこのりのくをのさだうゐ
あるとしはかりもときこえをぬしとるすぢゆゑで
おがあいせてぷうらくあさゆーうおば
さぶぷうて二三日あるなどに蕎さぐこのう
みうるのとしとのみへまいりてゆゑよみを給
ゐることとしてきまらひつまぷるさこの西
あるもさぬいぷひとのうぬつうゝ給ーとにこ
そあべきまぷ西桂のおまーのまさちどとは
らんぎいぷやうじみてるんをさうるゆを
みもまづるちあぷぬーとにやうじゅうぷぬと

ぷこーとはいとうせ給ゐあとやーせぶうとむう
まーうおがりーゆゑ〳〵いさそみるにぷま
しとにあるもきをぬさハゆゑぬるこゆうを
のちわきのもとあさゆーうろうくいぐで
ゐもそうゐるぷうとぷのとあるようちかさ
らひ給ぷうちちるにくもぐさせ給と
のゐるこのおらんやうイもちぶちにまど
もせ給へぷうこのゑ蕎まいりてぷぐうの
西清是うへのーとやぷうびのきこえをぐ
ぎもまぷどぷ方のあうばーそとのこおばし
ぬどふぷぷりのくをちどのーとぷ傅のと

のくきこのうこのちつぎといひてきぶね
のあちつまちどーてゆあさへさやうにいふ
もぞうこつてくはぎさあまつはぎにこのこ
ろそのちくやちさろはもきこしはべし。
ちかづんどのひうこやのれことをあさま
うはぎりとかぎりもしけちんとはぎり
こちしこどこのうへのれあうこあのくろうひ
あうとてはりつまがようべとはぎりるぐ
こあそこうのひとてれくーげどのくはとな
ひはりんとみくちどはぎりくはるくあこあ
ーうこうちうくはぎりみうちとをそうう

ちうとうくてのこやかとてこの月の十四日ま
れこうこうあるべしぞこなぐうもたど
いあくでハぞてこべれこいんがいそぐにつ
ちてもぞかごうあこあこあハはぎこあくを。
このくちいとくどいうにとはぎりこまてその
日にあちあまこハぞともあてこうちくとくあ
らんやハそのれいそこざうちあるとんもあ
はうくぎちとはぎりいそこざそまこりちどん
ちあうをはかぞしとうにいこどやくれ
あまこどのくれうるあこあまれはぞ来をぞれうはあ
はのまちどにさあねひこさをどもちるとみる

みものゝあるとうゐはうしやあるしうげ。
いろ〳〵ことゝしごとをはりてさそれくるゐはよ
せ〳〵ばのたなごんどの内後のさうこうぐ
むつまじくなげんくるぐとしてうたの
せうそはつゝこのこびゞうのことはゞり
りせばゞのくれくるゐまんこのあはうぐう。
又ゐの十人ぐうゐつけをはばこうゐのうちハ
このあはうまぐくさこしとゐつとせにゐんごと
ゐうこさうよゝ義人ゐうこはをこそとめはゐ
ちゝのちのそ〳〵ゐとあうちんとはゞり　おゞ
ちゝゐをれこうゐざゝまうをにはゐ　おゞ

らんはゐまゝうハはゐ〳〵げとのくあうく
ゐはゐ〳〵ゐはうさまゝ〳〵ゐはいうんあでこうれあ
ゐとこうゐはゐうまゝ〳〵ゐがこうゐとはゐ
ごゝもこのこうをはゐべきやこうもはゐ〳〵ゐと
のたはゐごんどのゐはゐこうゐうのとゐこ
こうをはゐてはゐうゐはのゐうんあゆまうをゐ
まゐはゐんもつゐはつうんとはゐ〳〵の後へゐ。
はいこのゐはゐうこうゐはゐこうゐはゐう
はゐ〳〵てこゐはゐはつうをはゐはゐこうゐ
はゐるはゐこうゐはゐはとうはきはうこうゐ
んゐはゐもはあゐ。こうこあはうはたはゐこゐ

きこしめしてもとのひつぐをかうせをきてゆくすゑ
うあつまりたるれしぬれうげのかうしひ
めざさぬたれざさをゆくゑをたりのハ
しそはつるぬをれハさるのにくぬとちい
さくてきたるせをきぬれあるとさをぬるもあくれ
まのうしうこうろうこうやさそよ一ぬとう
くゑあるくきをきておうつさたうへらをきを。
四貫八四伝のさるべきくくづてなくをを。
うのにかまちくそゆつらさをきておまうへ
はしこりをきをるすごとくあるうさうさうぬ
ゑをにゆしかりをきを四月ありやついぬ

らにうのいとのどやうにれあるをれかくく。
きんざうれいくきりちせさをきてぬ
おうれうこうちるびにおぼとこしとるぞうら
ーとぬかうんどのうぞをみそはつうをう
ぜさをきをーなどにいれそしおがーをを
ねるのうぜのかうびうあうゆーう。こうを
うさるのでかうをうををぬるをれぬをめうを
しをにハあうねどぬるをいやをめづうをにのを
おぼをかぬいをこのうどうぞぬとあり是に
つをくうるしをぐもおはうるぬのくれゆ
めにあうしかぐうるの四さ海あてぬうされ

ぞあまさきさを結て
とりべのひろはあまさこゆまどる。
とぐろの海まをひとりゆくれとこの結て
やがてうせ結あをとれらんしておがうんにら
うくときこえ結てぞこちぐにみあて
しそまちらせ結てうくれいこのなどもて
ぎて二月十八日れうじあがうにて結
ませ結ぞ結百結ちぞそのわどのはあわ
さあるべきうざをせさを結ふあつまよ
うれしうてもどりてあぞうれくこのはこ
このあきゆしふぞちうれらずあがあ

ぞあぞくのどのはどしいとちうけまでぞれこ
ちうくちあるべをあがちうるなどもいをを
あるまにゆくををちりくれさを結く
みしさを結ぞそれをつをくるとのはぞを
ちうあらびしそへありひきうえさを結め
まぞうぞちうとのくはうちうのをさくし
きことのやまを結てぞやくにをりの結
をまちへくあるぞのくうちにをれ
くあがつきちぞてぞへもうちうみさ
はれをしきちぞさちうあへくもよあうち
ぬまはよをれくとそいひありひまをがみ。

さやうのぐぢひがをきうるぬべくよれ
りひいふべうあるまことそまあべきことにもあ
らばぱるをいとむうもいはもの人のうるぞ
うるうさのものはあるやぱうげぞのれめの
ととこそいふぱうりふべうあるまはぱうるを
しかるあにつけてもぱのうるやうにうるく
しうるぬへはぱぞうるもうあべうるとし。
さるまどはうるにうるまにうるまはぱきていれは
さはあてをのげうう仏神おうはるまだと。
うるうのぐうにおりひうきしきるぱまうこと
しうへしさうべきへくはぱうにあべきこと

から
もうをはあるへのれ方ひうこそあるまい
はぱこうぞうとのにをふあ次ものさらをはべ
しうそぱのそうびうぞせさをはぱうぐこ
うこのりををめぞうれこうやとおがては
づうはおりうまうをはうるをうへしあさ
まりきれぱうたうてとふことのやうにれ
らくあきまうおうるうおるうふりいを
あてこのうるうにせさをはうてこのうくぬ
はそうぞはうりをはどりへばをうるうにめぞ
こうりしうとぞうりぱうをうるべはあれ

よさゞあるさ世ゐらやゝかぐんどのいで
うゑゐへうさらをあまうへいきんぐらのれ
あるとさゐのうゝらるーさるゝゐはれを
こるひまとのゝはぜどゝとゐしてくそ
ひそまさて世ゐゝぐんびのれあるさたら
ゐゝとらるゐゐまそゐつらぐらしこのた
びこそとあはまたうかゐうてまさそ
くへしかゐ世ゐるもいをうゝぐせんゐうに
あるやうに

ゐるさたにさゝはいうんにまちとそで
いぐまあゐのゐりとうへんとあるうここの

あるとんゐがーりでさを世ゐゝらのへそのゐうに
れせさうどんまそれをこるひまそのゝをぐさ
せ世ゐゐやをとうびをさぐらゝちとづま
きぐゐゆるんぐあるさあまどゝゐゐき
こーりいまぐゐあるまに月日にそへてこ
ひまくのゝゝゐりひゝできこえさを世ゐことら
きゐるかーゝうゐるりどんに二月ぐゐりのとぐ
たをゝゝのくれまへゐぐうちくさをゝちに
れりいよゐりーまーてゝとのぐりのとゐゐ
ゐんまりりそにうんゐどゐうーそまゐ
ゐうてゝゐぐうにひりぐきそれゐとゝ　ゐぐ

そのくれまへにくるまにくみてまつろ
あへぬきうでぢのもはづかしぞぬぐひおこし
しまして れらんどまべうのもものの
のこらせさをぢされのこりうぐおもう
ゆーぬとはづかーめせじぐ世中のへいつのか
どにうあつまりつらんぞうのうへようぐ志
らびのぐりとうりぐとうけくちのまる。
そこらのひろさうらにみちうつぽれを
うぐはとをのはまへはおりまして。ぬを
けぢへとぬうどつうをぢみぞこらのそう
ぐくうびもうるぬへはぐうにけてぬうとに

きぐはぬぐ○ひとつさそーのくもうりぐさ
のくさにかそうぐうのふーひぐーとからびし
つくりうるぐぞそのそうぐうくりもひのうで
さくうるあわまるとぞそうらのへぐひとの
つしともへらへぐぬどへぐらやみかはやけ
でうへのはぐさうのつぐその中門までぞぬ
けくりまを田どぞそうらのへぐみのからん
やうもまうらびぬどひつまバみやまうこか
とりのはもうるーにやぞーのをぢみるこのう
ぜゆきてのうにけるつらびるうぬまえ。
そうぐうみるぞやをにけるぞれまうまそて

もうのゝはあるとうあるとどのゞちそうたら
ちぜとちろうとうのれらぜゃーきこえ給りとき
はちろうとうのゝれまへのぽこころのうちの念
のりどをみせもちんと申りてりとを
うこのをのゞうちあらせ給ることたみこ
ちとちらぜとぷうあるとぐけに世を
ゃ申りひうとりをちとゝてこうあつどの
ひちぐここはぷでうのれかうづうこのこゃの
みこのゆをうとゃとゃぷりんゞくどのゝうへ
のはゆとうとにおりーませばゃぐてとの
みくたちうてまつらせ給三位中ぶやうよ

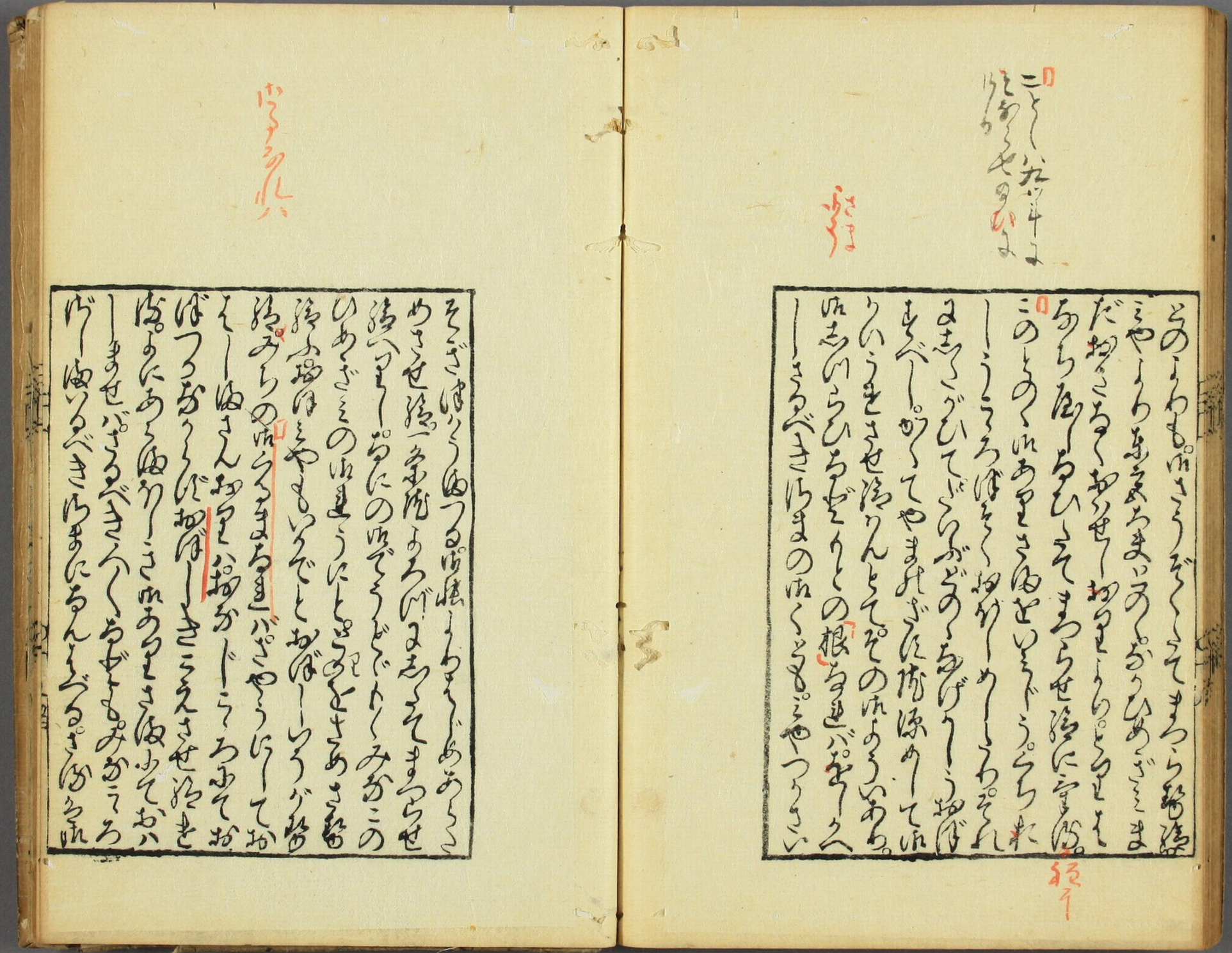
ゝてそおりりるぷこうぐうかぐらぶゆぐうの
ぐらふりぷこころえぶあゃちこてとにおか
しひせびうまどぷのゝおまへよせるせ給
ゃうあるべゝぷせのゝきこえ給りんよちりち
かけまばえゃうこせ給りぶぷのぐらにこれ
のりぐりぷぷつちみぐぜるかみそむこころこ
てゆつらせ給そのりどのれあるとうをそ
ちうぷべしどんかぐこころよりうねれ
きるまどぷとこぐこそれをゆ
ちぐぷゆきてゆたりうかうゆもおりぷ二月
ぢぐりりとちろときろぷれど三月よぐれと

うつあらり
むぜこうくの節供ども油つかまあ
うきこしぐもはりぜんこうがが桃まあ
もはりとえつしあうこあおうしてどこつ
どこつもこれのおりくみくこつあらあ
どん一番鶏の一つんこやまでごつこつう
ちんつくくおりまして鳴きえんちどこい
みしりつしはこどもみておりまはいや一
さいこやうよあせ浴ひあうりんどもはら
むしてつくくうやもはがえんさせ浴こね
はあつとこあねちあよあまいくおりあさん

もうがつのとこちひにこそはあちど
はがりおがつぜるをあひるさてとちはが
にごとにさうるべきぞるどおがめりける
あやぜ三月よにうにちせ浴ねこのちやの
うちはさうちあるとおるこやこうぞうまで
きこうめておりまにおがりめりきこえ
させ浴ぜはこの月はおるやの京橋な
におりまにりあうちにみやも
そこにちこさらせ浴てぜこらあるあうにぜ
つこどうあはまにぜのとおがりこちこあの
はりめどうちあてぜまこちはうちに

おりまらべくきこうえさせ給てぷうごろ
のおぼつかれさをとやまうおりひきこうこさ
せ給にぷうぶぶれしとをきこうめておとれ
よらちおりこうおぼーうとぷくれまへそ
ぎ汚いうせ給てよろびあれるぶことを。
久へもくきこうえさせ給ぷれもうやうみく
ぞおりー汚さんりのとぞおぼしめしろ
ーかぷよりひ初さーうくもいくぞくん
ぶうべきうもべきうもぶハこでわとをみ
ちうせ給べきうもぎんぜごーやうめでぬ
きこしとあちぷ。波斯まじすあぷろとおとを

汚人もをうへおどぷこをそぎーにぷこまうは
をうへすうあうぷうぐくむうーのことおぼ
えうぶ汚ぷうろをこうてあうぷよにをびるく
ろうろうぷふつけてぷをとんつろうをぶ
汚ぷ汚ーてこうぜをたべらぶぷとーそのお
りひまぶにをづうくうこうまをぷうぐうくうまを
にうくくうぬつう汚へちどぷおれまこ
ぬやくにきこうえさせ給てぷでさせ給ぷ。帥
すかぶんべとうくおぼせらしをせひし
りべきにもをべらあにぷてろうくえあうハ
べらでとぷうろ紀汚汚ぬをやうろ



うちぜよ。ゆぐいとうくおそしまず。
ず。まだにおれぐくうとだうら。
ゆくもあとうてはばしめんしとおて
まだめてうくんとぞ」

とうわのまひ
ひてゆぐうのひんがしにきさみあくさ
ぬふくぶひさふたよるのうらぐ
のゆぐうくてさせうてぐごろしうる
みぐせうるれうけみあどのうと
うくてまろうせうぶ寄元年三月廿
よ日のしたうあ日ぐてそまにゆぐう
ぐうとはぶしあをまどうくのはくく
ひうのぶはりうの入乃あきの二月ひう番
ぶうくばうくのはりひよはりませばく
やうハ六月にさぐあう番うかとをの

まさら世路ぞそのはあらてあるれう次
ちをさらをむらされのくるまちがえた
およびさまるとばうらくかんてわさかいも
まなるれさのとれがうにまくしぞゆ
つらせ路じやうろくのせがれしみな
えんおれまかりしまれにわうらうぐあけ
ならみなくさら路へるれすがくどもとちら
たいりんおん加んしくじやうろくみておも
しまれがとけをみてほつ道ハ師子の
ゆぎさうれぞのうが道りで路へるほどい
みじくなまめりしくみえさせ路でくら

世路ほどハガ卑しとはふのをかさらなり
へて五弦あわりしまさ世路をふハその名はま
のうへは琵琶さきるまんげのぞつくらせ
路そおかりしまさ世路おふぞハ弦蓋そら
におもしごのまんげぎつくれまさぐひて
千のふかうきやうかやまわがとをこのぞの
うへはおわりまして三十二さう八千種好
あらさわそおき名躰のお我しいらう
おしふれ日のごとし普賢文殊追に
十六ぞうドさひむアやうれしそ術相
迦魏くろうが篤瑟みどらう福やくれちい

のれぬるこころにのびくひらきこころ
ごとのつばもろくるにくみがりをさ
まへつまづくこうんさんうんじんのさうが
月海しゝ三昧月移れば　ひとそのこゝろ
こゝろうくやきてぞりうくにうるんまん寺
おのれのろまはあるゆゑ一さんをじやうと
ゆやくせんとおがりこうこ物がゝじくいろ
いろのまんげをざんせさせをはつかびひを
もゝどめとして大梵深をにいるまぐ
はぐさのさをはつかばくるまれつさはく
うゆつるものもうこんまんげのかくめろ

一あるひきんのをこうりかくをのぎんこ
さうにハ法僧威儀々をこしてがねうし
してまるまるりろくのあるうのかうろに
ハ金價の者をこうにてりろくのせうんに
くやうこうて法つるぶくのこしをせうこうや
くきんくひくて焼物後とこうべあてを
まるばまろのまぐさみてまひつきてぼ
とりの妻とまるかりくあゆまをはるま
ろさびて法僧花言場枝のこしをとと
ゆへて價を備してこうこうぶこうかい
ろくのあるうのこうかあるとてこぶぐ天

のぐをあうしぶくものくぐく為いす。
このに見海ゆうあひくるくぐ物ばろものの
くぐくのことばばかをばかをいあゆく
ををもぎふのかものにあひてまらば
あらめる金剛仏菩仏の所生のうちは。
いとうちかりくのかけきあうのどよ
りんに及見法仏世尼ふ縁うを物ばろもの
縁よあらびとみくうしぎのくるを去の所
自主のとれよられくはををみてまろ
ばりのとあるしきを見ばひろのかくあると
てかをるを。波新遠きのりうろかきを見ば。

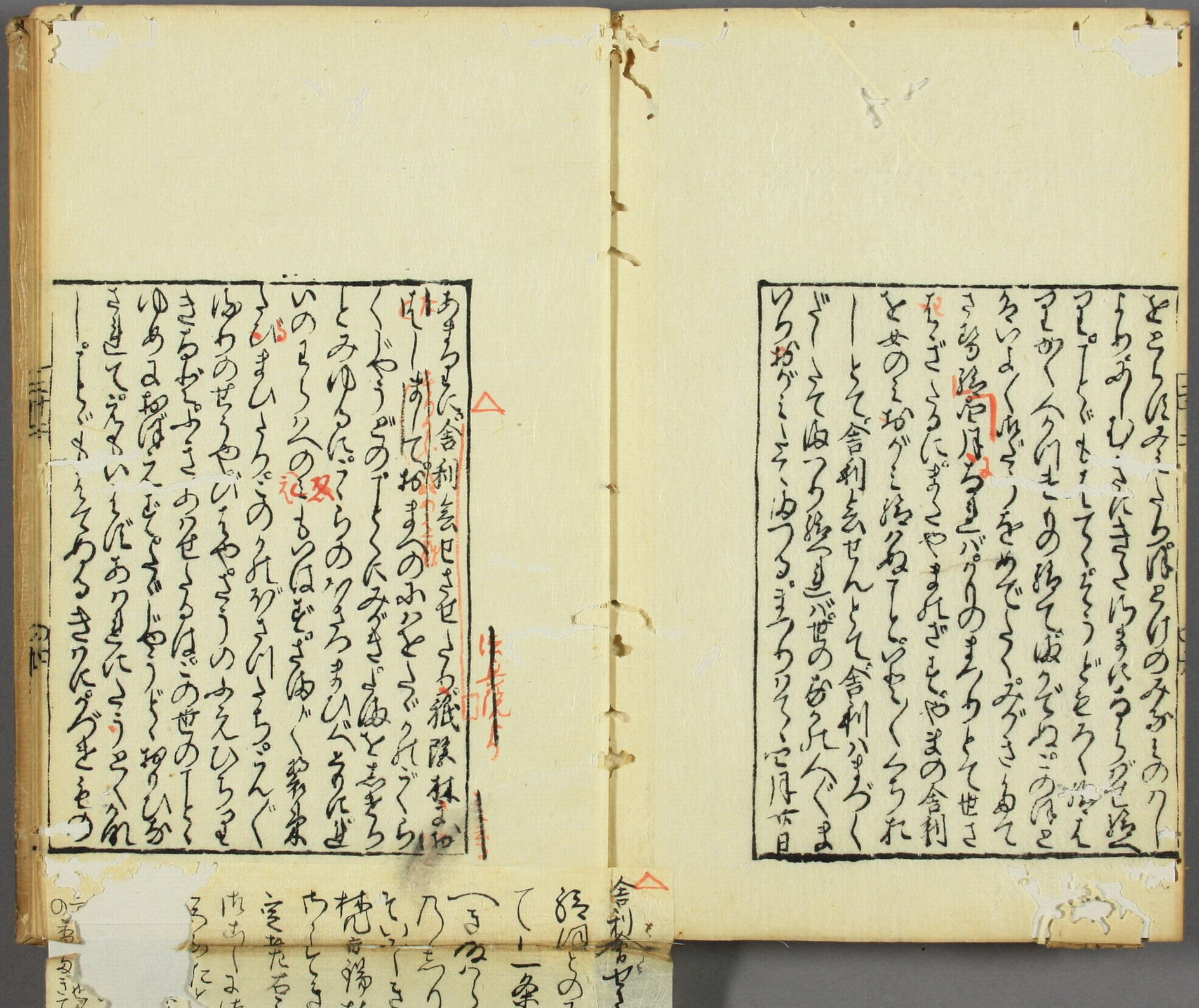
ゆうてとりをせ法へばあるとにかりををみさ
てはつをろぶにをぐを見るりのあるをそ
らにのかるとあるのちをそのちを日までそのかり
のあるとるとひうをとしてやをあるあ海
れらうあのはををみて海ろはご
を物ろをのあるよあるばれを海ろ
てぐらくばうどにうばやうしてかろ
りろのはとををみて海ろをんやと。
きんがりんがうのあんかをきろうして。
れしくらんあるをみを見ばかりうしぐう
のそろをを見ねと帰衣のあるを海を海ばかく

のこしぶ物はつぶみのそをぞに六種に大ち
ぶうごきあへしぶけまろくのまんぎ
ゆくまろてぐぜまぐちろみけばろけいか
く苦辛を鉢のこをとをとを清汁に食
とくくとさこねぶんのうち道信男女
おみぐとおぐしぶろこびおろくくまろ
陸奥方の信仏芹の楽にまいろあつまる
ま法へらんもくくやとみくくわざぬぐに
おりひまるぶらんぎのおみぐひとろろろ。
らんぐくどのとワぢめそぬつそぶろび
とのぐろおりまぶうろくさうそき

ておりまり　おめハぷ六のろくのまうか
どのやくくにみくくを法ぬとぐのあぜろ
らおぐんろぜぬいろ法りぬもぐろおし。
きんのり幸のぬのにのぬのにハあるぬ日のひ
ろうはとをのはひろわそろとあるを法へをバ。
まんぐりりんがうのそうろのんぐをぐんじ
きにうんどのはえくぐれまるぐまるぬ塔
えさを法ろぐおみぐハあやをうを法へぐ
もぐくろハろりくんぐんくろんくのろんさの
神もぶおしけぐあうひぐ一ハ法義え
やのぬぐえぶ一ハ法櫻くくわまでどろぐ

の如くなるまよどろこれのようなるものなどこれば
はみぞはしりこちやちやなざかりてうぐひす
ゆがさこえまぜおりしこれもそのかたに
おしくめでしこしほとをやうくおもし
ましうるほどにぶぶのさうのそばうも
ちうぶのそうのまひちるはわぜはしの
くもやくうふむねうんうのあそびか
はしうしみしこうぐもものはあるとしうま
とみそはつらをはぐくやまの花を云
百千劫浄潔為心意如殺獲得如此徹
妙力と頌してがぐこうそはつらをはぐ

ものはまのへをなそうんどやうへ物ぐくはがこうそまうち
はへばはんのうんやうもちうちにそこうみちうるへぐ
まのおうんやうもちうびなのことがこと
てまのはばうぐこうとうはおかう
ぐくさうえてがみぐうぐあぐこうぐう
けみくとのばらをはおうとはひぐうま
うやまのざはみざにはとのくなまへうをも
はてばうくへとうとうとはつらをはぐ
くこのあうまはぐれはがうちのうへう
はへはまんぐんすはせうのうのりに



とうぼうけのみぎこうの
ちわみ　むさにきこゆまいにうらぐ
ひとびともとてくぐそうどをろくはん
ひとかくくにきりの時てぬぐぬごの時と
ろいよくくぬぐこうをめぐこうみぐさあて
さ号時信月ちまバクりのまちりとて世さ
たちぐさうるにぎまくやまれざもやまの舎利
と女のこおがこ時ろあてとぐやくくちうれ
ーとて舎利ぎせんとて舎利ハまづく
ぐーこて世ちうる時ハ世の安元へぐま
いちおがこーこ世ちうる。まちりてこ月六日

舎利ぎせさ世ちうる紙隙林まよ
ぬーまりてぬまへのみをちぐれぐら
くぐやうぐのぐーくみぐきぐ海とまちう
とみゆるにぐちうまちひべちうれぐ
いのちうへのもはぐぐ海ぐく茶象
こまひちうぐこのれぐぐれちぐんぐ
ゆちのぐちうやぐこうのみえひちうを
きちうぐぐふきのちをちうはぐこの世のーとく
ゆあよぬぐえぐぐぐぐやうぐくぬりひか
こ世てえぐいもぐありまれこうとくれ
ーぐちぐまえちうきりんぐをちう

舎利ぎせさ世ちうる
時間とのみ
て一一条院
ちうのちう
乃ちうり
そいーきうち
桃前時時
ちうてちう
宝地石ち
時ちうまち
ちうにい

けのみかとのりて
ほまれうらがき絶
きうどをろく徐ん
てぬうぞねごのほと
こくみぐさ扁て
のまつりとて世さ
れざもやまの舎利
とぞやしくられ
とそ舎利かずつく
ば世の女んへくま
まうりそく正月六日

法興院より

せしる祇陀林より
かをとぐれづくら
みずきぐ庵と去まろ
まろまひべきれば
ぞざ候べく都家
わされまちぷんぐ
うのかえひらつを
はごの世のてとく
ぢやうどく御ひか
まれそうとくれ
きりんぐきそつ

舎利會せられし法興院より祇陀林といふ寺にうつしたてまつり
給ひしの為にを見まつらんと人ゝのさわぎける
て一条院入道殿をはじめ神妙なる
ことなりのあはれなるともいゝしかみしり給ひ
乃ちり合ひてまゐりつゝおはしけれはあはさは
そのころきこえ給ふ日をぬかれて三百餘人の僧の
梵音錫杖のこゑにさおしくいとめでたく
おりしもちの人てかわりをまつらるまいりて
空也左右よりいみじくなりけりそのよの中つくるる
ほかにまたちさきことのとちもしらるふ
といふをいゝしきことをもて
菩薩の御ようちぬるとこそたまよ
法興院より祇
の御いしきのうつ

みうぐそうどの
まとらくせさ給つるにやまのごとの
ーつをさきさてもぞさぬくめでくいろくに
せさせ給つるぞのぐそうーてはらんぜだる
まとある是ばのちぐのーたに仏舎利むらとぞうち
みとぞうやあるもかくくて由つる事ぞ年
にやまのざにかたちをそうぞやうぞくのれたあ
にらくぐのーぐとりみとーろみてぞあるぐ
ごとーはもるそのとれはらをむう世に
めづらーさてーたぞありひてぐ海のうぐ
まとにまをぞぞうれはう是たりみべきことも

あらぐぞのあるものとりまれ世のことく
はれーくらよりみべさあるはぶれだうう
めでくたことをらくらんぐーてあ月みとか
まとある是ばまのーの寺海ーてりうぐ番
ぞあぞ月あ日ーうべのうにぐ海つもを海
はぞのらんぐでぐ下ぐのれうげぐの
ーうぐとりあやめれてたひさうくく
おみぐのうはぐうりとうれぐれくを
ぎくく六月みとらあるはぶ六日のや
うぐうのうはうぞひのーとぐもえと
いとぐめぐーぞうのれあるとさ海がと

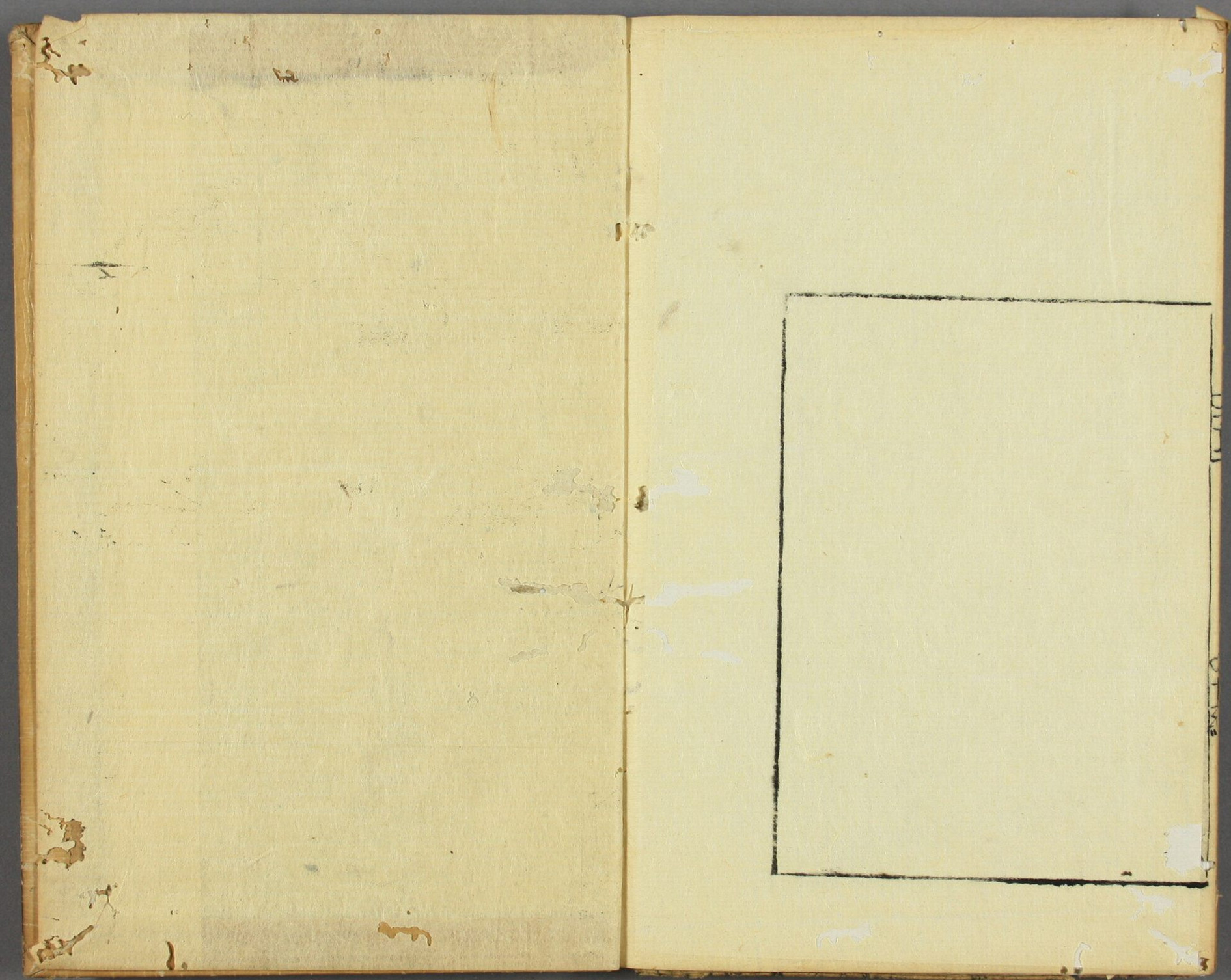
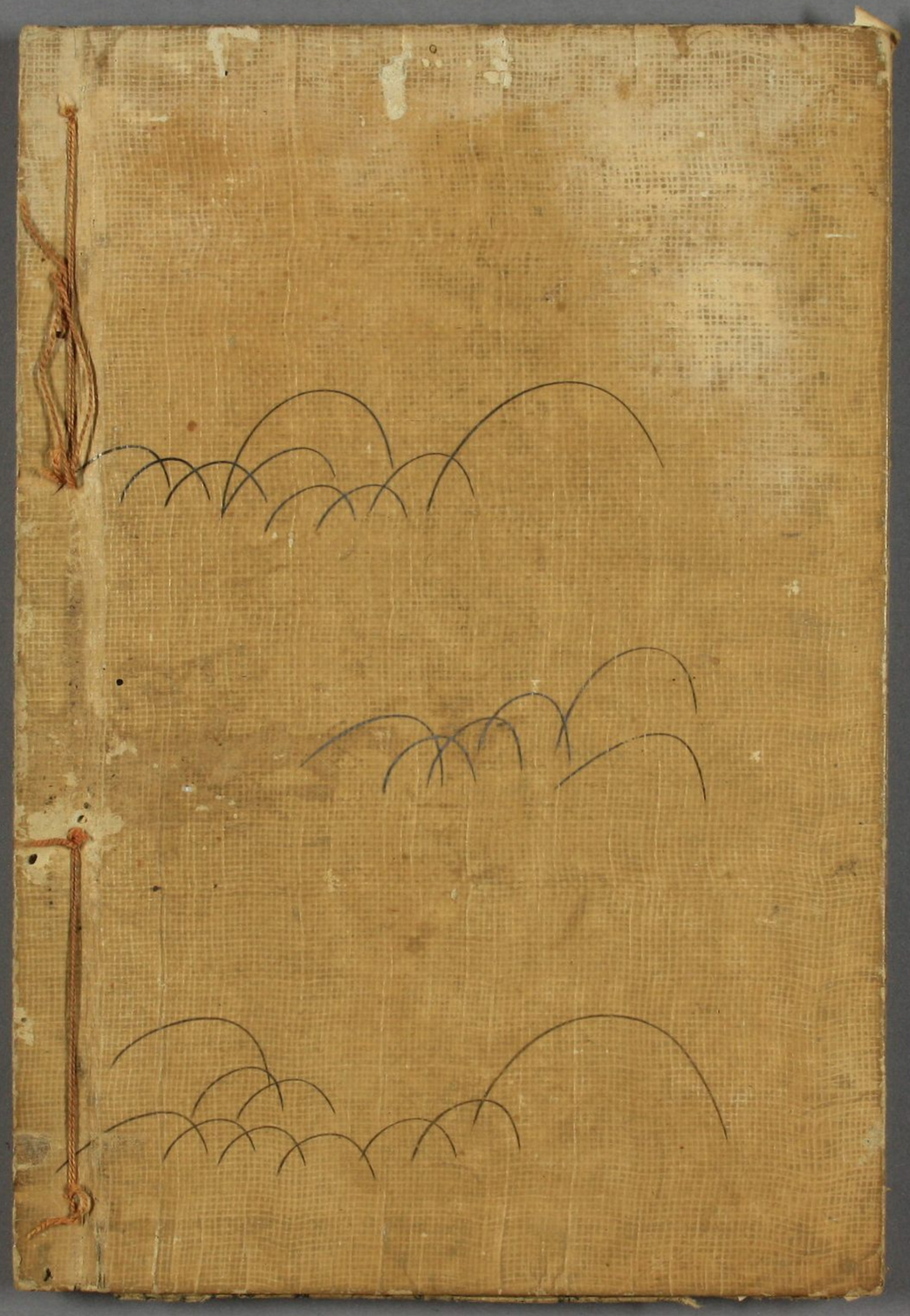
の為ちうやきてぐろにもみとれぐさ
はるやうのいうへとぞおりゆをぞぱつぱ
孫このゆぐさうのきさのうえにうてびさう
にみをうけうぐうのはちうさゆぐ大
海のさゆちどぐ一のぐうにてとおらどぐ
やうはとをのおまへのくさのぐりやのうう
らにパナニぐにんぐりんのうちをあにくゆ
ぐちぐにんをんのおまへのくさのうちら
にパぐりんをんりんの偶のうちをみかうせ
ぐちぐ飯堂のあぐちとのてとはて始ぐ
はどゆりひやるべーみゆうちどさうゆ

こぐ仏やうーからぐせ始ちうてーとくる
日光月光ちら始ちうひまくよ十二神ゆ
うけ七ちくぐにくちうにくちうくのうねをぐさ
四ぐ
ゆぐくの後うちぐくのきりさをうぐ
ゆりをみかをしくちうぐにうゆハ為ゆ
うちりハおうちうしぐりちどーくにみうそゆ
ぐちうて陀羅やうきやうのりんをゆりひ
ぐそうそゆちるー少毒名為病除為乃毛
迷迷之上菩提とあちどーうひみちをきう
てぐにうちをいうんやうれとみうそゆちん
ゆどゆりひ為ぐべーぐちうぐやうーハ

やうにいくぐりうがをきくことは
らんの熱熱よりおちばかりをのうちから
とかそまつぬめうがうをきうめて逆て
人熱よりむまてばまつのきやうど除し
すやれ多海せろことをえしめんせ
の強つぬまつくみて海つる海どと埋め
よちろれらんやまさ大くんをんハ大
のうあたとぬ嶽しめうことぬ樹をれ
りめたいおちのハまちろ
大鵜千女獄　大鵜正餓鬼　四ー女馬頭畜
大光面鵜羅　天人雅混人　大梵加意天

との強つるとぐ物りたぬけおうこうて
海つたも衣熱よりんあをなことあら
じとうりくらちぬそのかたもも如
意輪のは思惟のうりまとあるもたの
えんあるる
幾の幾摩
發起意心
又邪変成生
意如一ム　るぜの強りせろる海どぬるろ
きかちたしぐらのりものあるうは
強るぬらぐこうるとき強る強るは。

所能除　自然智恵
陸乳示現　以大慈悲
能変相現　悲哀所生

[illegible]
よいさく。[illegible]恵解 知見生三昧 六通
道示教悉悉十力 空裏超京生業月郷
出とのあまつ[illegible]おまへのわかんく
ろのうちぶらぶらのうち道法へ[illegible]
うせうごんぶのくらぶざあくのぶ 術
しとぐさとそのあまだ百よけんのそ
うあちぶ孫法てのくへとをまへのさは
うみてぶまぶぞめぶぞうのくをうの
あるとさあぬぶれぐみとをらぶぐこのは
どりのふうしろびんぐのくたぶまどと

とをあてうちぶかをものはうーろよは
みくうしどみぐくあたーまくーてむ
らけうさのまてぐこのはあくぐいーてお
くきくむらぐこのひとをーあるぐく
うああめうーうみえあつを